



インド市場の現状とスズキの展望

Japan Mobility Conference 2023

2023年10月24日

スズキ株式会社
副社長 鮎川 堅一




1. スズキ株式会社について
2. インド市場について
3. 今後の展望
4. JAPAN MOBILITY SHOW 2023 出品概要

本日は、まず弊社およびインド市場の現状についてご説明させて頂いた後、今後の展望と弊社の取組みをご紹介させて頂き、最後に本年度のジャパンモビリティショーへの出品概要をご紹介します。

1. スズキ株式会社について

まずは弊社、スズキ株式会社について簡単にお話させていただきます。

社名:	スズキ株式会社	
設立年月:	1920年（大正9年）	
代表者:	鈴木 俊宏（代表取締役社長）	
連結従業員数:	70,012人	
連結売上高:	4兆6,416億円（2023年3月期）	
本社所在地:	静岡県浜松市	
連結子会社数:	120社（国内：66社、海外：54社）	

※2023年3月末時点

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 4 / 37

弊社、スズキ株式会社は、1920年に静岡県浜松市に設立されました。

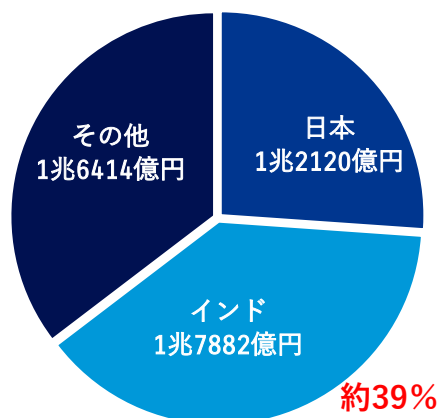
グループ全体の連結従業員数は7万人弱で、昨年度の決算において連結売上高は4兆6,416億円と過去最高を達成しました。
本社は静岡県浜松市、連結子会社数は120社、国内に66社、海外に54社ございます。

<補足>

- ・国内工場数は5工場（相良・湖西・磐田・浜松・大須賀）
- ・海外生産拠点（子会社）は17拠点

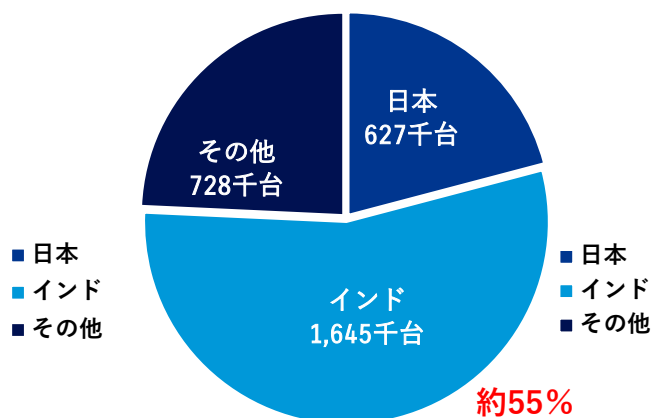
連結売上高（地域別）

2022年度 4兆6,416億円



四輪販売台数（地域別）

2022年度 3,000千台



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved.

5 / 37

昨年度のスズキの連結売上高は4兆6416億円の内、インドの売上高は、日本での売上高を上回り、全体の約39%を占めております。

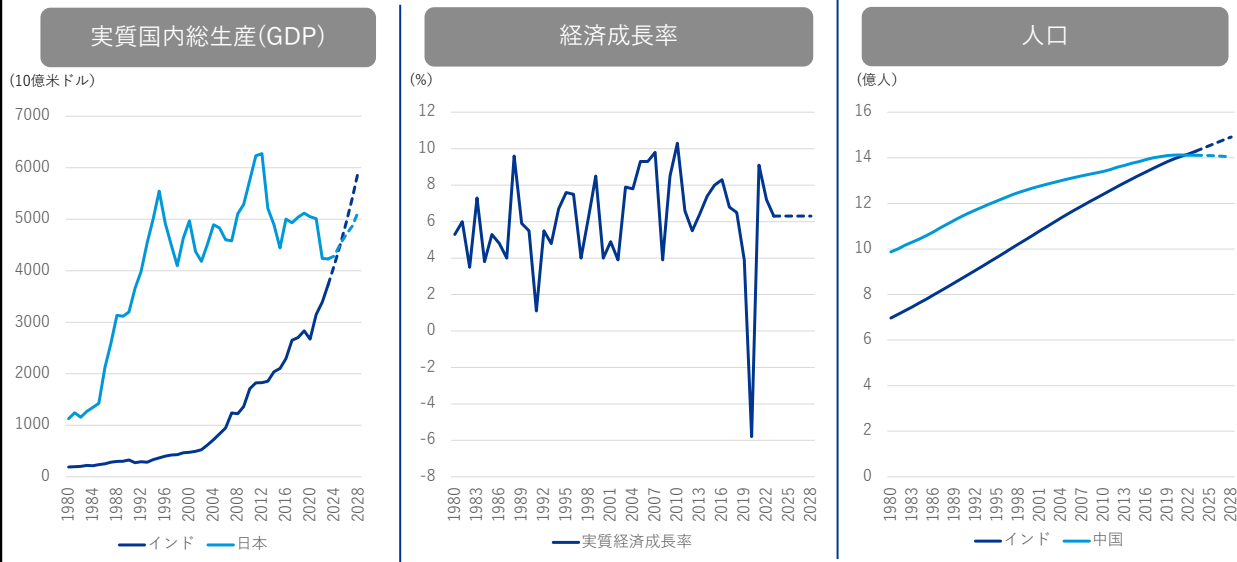
同様に四輪の販売台数についても、昨年度は全世界で約3百万台を達成しておりますが、その内の約55%がインドでの販売となります。

このように弊社にとって、インドは非常に重要な国であることがご理解いただけたかと存じます。

2. インド市場について

つづいて、弊社にとって非常に重要な現在のインド市場について、お話させていただきます。

インド経済概況 | 実質国内総生産(GDP)・経済成長率・人口



出典は全てIMF。グラフ破線（2023年度～2028年度）はIMF予測。

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved.

7 / 37

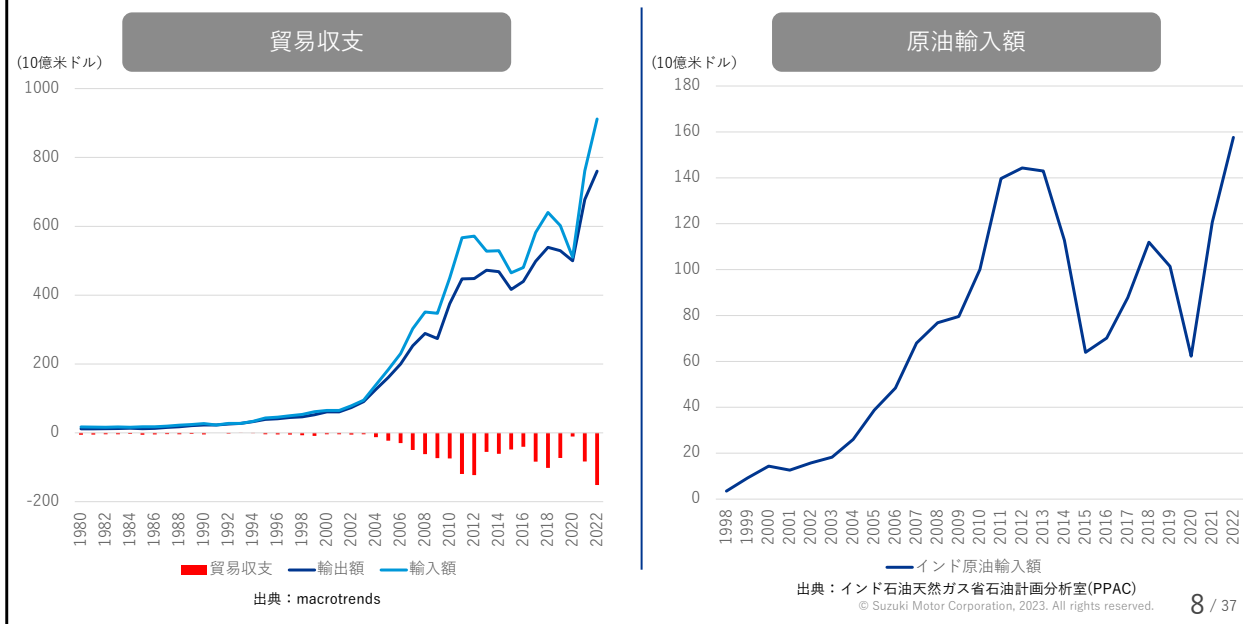
まずは、インドの経済概況についてです。

IMF（国際通貨基金）によると、直近のGDPは3兆7千億ドルであり、日本の4兆2千億ドルと同水準であり、経済成長率もコロナ禍を除き、6%前後を保っております。

また、人口では、今年度に中国を抜き、世界一の人口大国となったことが、国連人口基金により発表されました。

今後も益々の経済成長を進め、2026年にはGDPで日本を上回ることが期待されております。

インド経済概況 | 貿易収支・原油輸入額

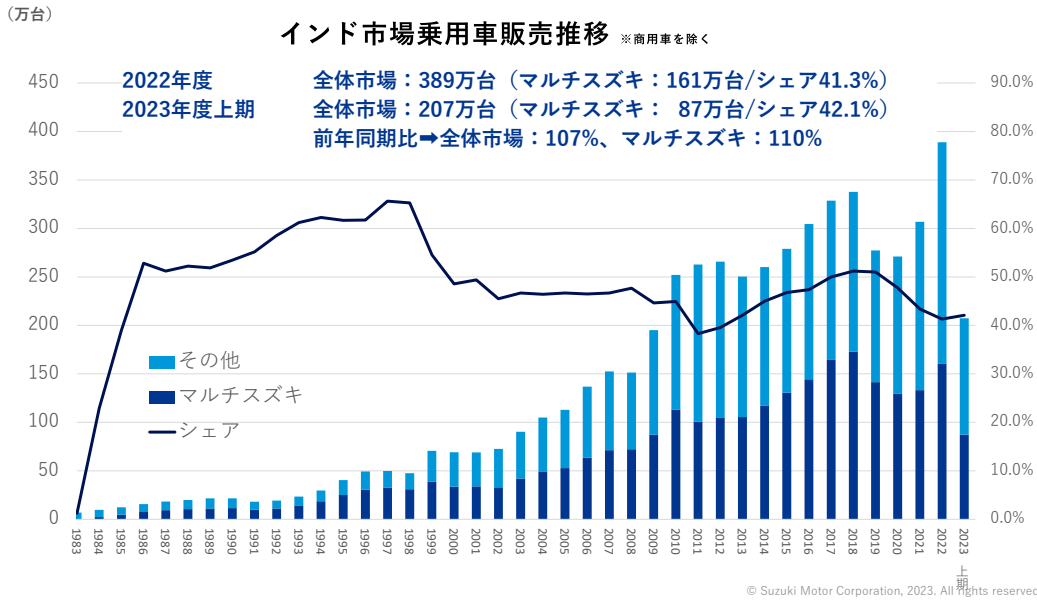


一方で、好調なインド経済ですが、貿易収支を見ると慢性的な貿易赤字となっており、課題を抱えていることが分かります。

輸入品目の内訳では、原油、石炭、石油ガスといったエネルギー資源、中でも原油の輸入が多く、ここ約25年で輸入額は約45倍と急増しており、原油価格が急騰した際には合わせて貿易赤字も拡大する傾向にあります。

インド政府は貿易収支の改善、輸出力の強化のために、製造業強化を目的とした、「Make in India」や「Self-reliant India (自立したインド)」といったスローガンを掲げており、弊社も現調化の推進や、バイオガス事業などを通じ、貢献していきたく考えております。

インド市場乗用車販売推移

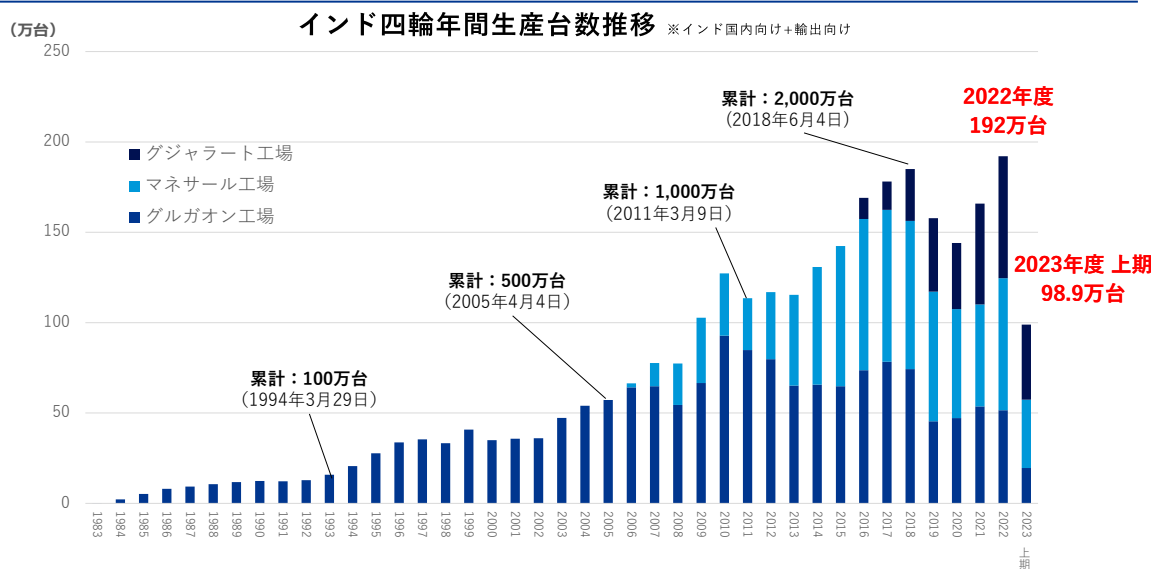


ついで、インド市場の乗用車販売についてです。

インド経済の成長に伴い、インド市場も昨年度は過去最高389万台、前年比127%へと拡大し、暦年の販売台数で日本を上回る世界第3位の自動車市場規模となりました。

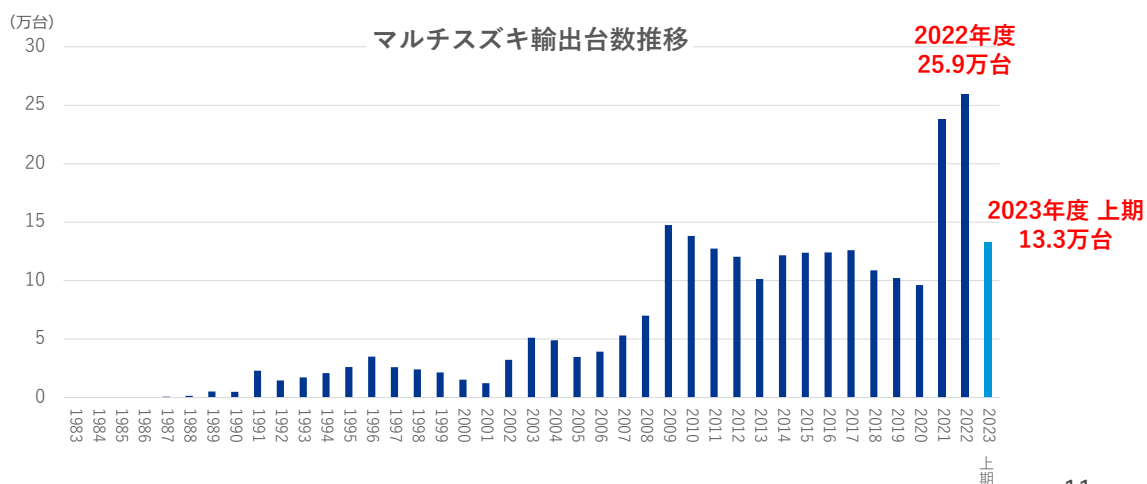
マルチスズキは半導体不足により需要に供給が追いつかず、卸販売台数は161万台、前年比121%、シェアは41.3%に留まりました。

2023年度上期をしてみると、全体市場は前年比107%の207万台、マルチスズキは前年比110%の87万台、シェア42.1%と過去最高を上回るペースで推移しています。



また、こちらはインドでの生産台数の推移です。
 2022年度は過去最高となる192万台を生産しましたが、半導体の供給不足が販売のネックとなりました。
 今期の上期は半導体供給が緩和され、98.9万台と堅調に推移しております。
 ※TKM (Toyota Kirloskar Motor) からの仕入れは含まれていません。

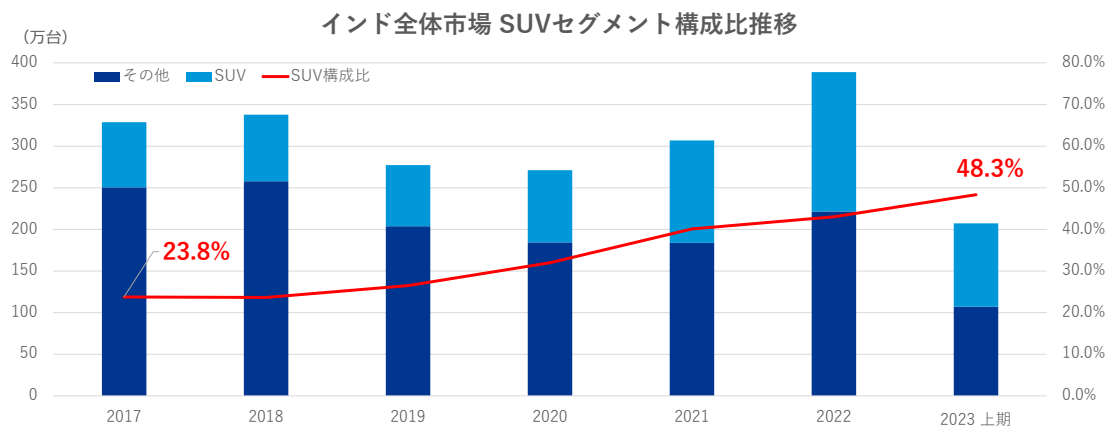
2022年度：25.9万台（前年比109%）を達成 ⇒ 過去最高
 ※直近5年間で2.3倍に伸長



続いて、1986年の輸出開始以降の輸出台数推移です。2021年以降、アフリカ向けを中心に、輸出台数を大きく伸ばし、22年度には25.9万台と過去最高の台数となりました。今年度上期も13.3万台と過去最高を記録した前年並みの輸出実績となっております。

全体市場：SUVセグメントの構成比が大幅に上昇

2017年度 **23.8%** → 2023年度上期 **48.3%**



そんな、インドの販売状況ですが、近年における1つの特徴として、日本同様にSUVの人気が高まっている点が挙げられます。実際に、全体市場におけるSUVセグメントの割合は、2017年度が23.8%だったことに対して、2023年度の上期実績では48.3%まで拡大しております。

SUVの新モデル投入



Fronx (2023年4月販売開始)



Jimny 5-Door (2023年6月販売開始)

SUVシェアの増加

2023年度上期 : **21.7%** ※2022年度通期 : 12.1%

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 13 / 37

拡大するSUV市場に対応するため、マルチスズキは昨年にブレッツァ、ランドビターラの2モデルを、今期はさらに、フロンクス、ジムニーの新型SUV2モデルを新たに販売開始しました。

その結果、2023年上期では、SUVモデルの販売台数は約21.8万台、SUVセグメント内でのシェアは21.7%を記録し、全メーカーの中で1位を記録しています。

引き続きSUVセグメントを含む乗用車の販売台数の増、シェア獲得に向け尽力していきます。

排ガス法規の動向

2020年4月 インドの排ガス規制「BS6」導入

2023年4月 RDE基準を追加した規制が強化された
(BS6フェーズ2)

※RDE…デリー近郊の所定ルートにおける
実走行試験による排ガス基準をクリア
すること

安全規制・新制度の動向

BNCAP (インド自動車安全評価プログラム)

自動車の衝突安全性を☆で評価し、自動車
購入者に提供するプログラム

スズキとマルチスズキで協力して対応していく

また、インドにおけるその他の課題として、各種法規への対応がございます。排ガス規制では、2023年4月にBS6のフェーズ2となる、RDE基準（Real Driving Emissions…実走行排出基準）が追加され、規制が強化されました。また、交通安全に関する新制度としてはインド自動車安全評価プログラムといった課題が挙げられます。

今後も、スズキ、及びマルチスズキで協力して対応を行います。

【ご参考】

RDE：Real Driving Emission/実路走行試験

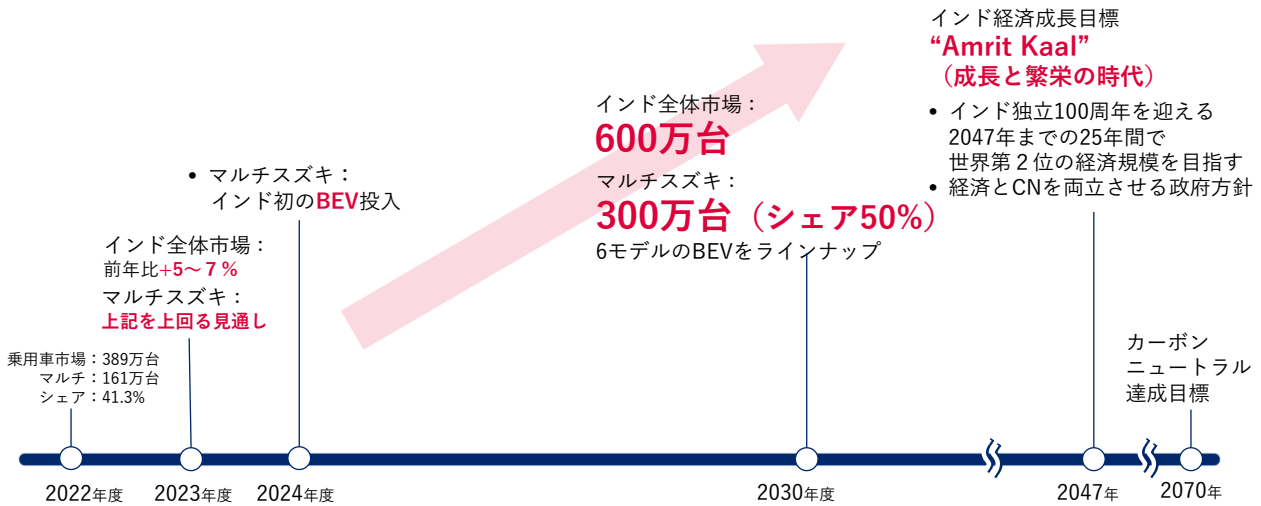
※RDE…デリー近郊の所定ルートにおける実走行試験による排ガス基準をクリアすること。

BNCAPとGNCAP

- ・両NCAPの評価項目に大きな違いはない。
(正面・側面・後面衝突乗員保護、子供の保護、歩行者保護)
- ・BNCAPはインド道路交通省副長官を議長とし、道路交通省や重工業省などが委員を務める常任委員会によって運営される。
- ・プネの道路交通中央研究所が指定期間に指定されている。
- ・インドが評価機関を自前で持つことで、海外へ車両を輸送する必要がないため、試験実施のコスト（時間とお金）が低くなるといった利点がある。

3. 今後の展望

次にインドの今後の展望についてお話いたします。



インドは中長期的にまだまだ成長が見込める市場

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 16 / 37

まずはインドの今後の見通しについてご説明します。
皆様もご承知の通り、インドは中長期的にまだまだ成長見込める市場です。

Amrit Kaalという言葉に代表されるような、インド独立100周年にあたる2047年に、世界第二位の経済規模を目指すべく、インド政府も経済成長を促す様々な施策を積極的に導入し、2047年までにGDPを10倍、製造業を15倍に拡大する目標を掲げております。

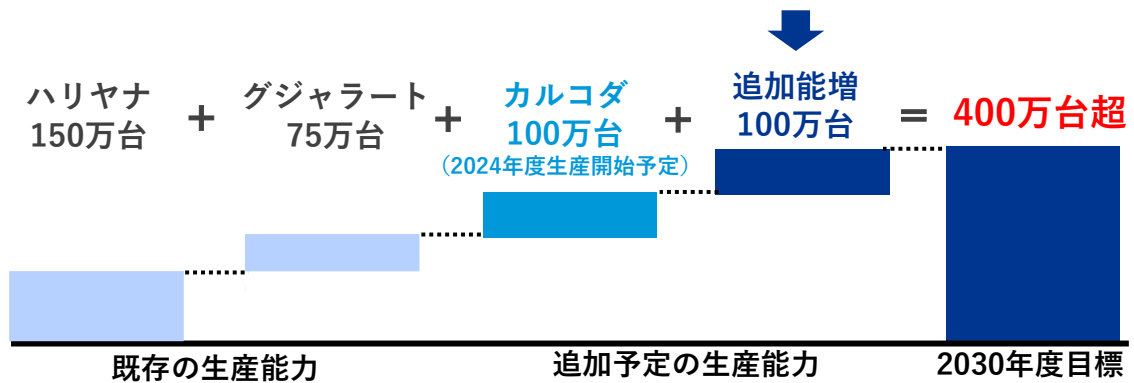
そうした成長の中で、2030年にはインド四輪の全体市場は600万台規模に拡大すると期待されており、マルチスズキでもシェア50%となる300万台の販売を目標としております。

また、経済発展の一方で、環境問題という点からでも、インド政府は2070年のカーボンニュートラル達成を目標に掲げております。

次のページから、それら2点の目標を達成すべく、スズキとしての取組みをご紹介します。

生産能力 2030年度目標 **400万台/年(2022年度比約2倍)**

市場の伸びに合わせた継続的な能力増強 : 100万台の追加を発表



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 17 / 37

まずは、販売台数増加に際した生産能力確保についてです。先ほど申し上げた通り、2030年の市場拡大に合わせ、マルチスズキでは国内向けの300万台の販売台数に加え、100万台規模までの拡大が期待される輸出事業の需要に応じるべく、2030年までに400万台の生産能力を有することを目標としております。これは現状の生産能力のおよそ2倍となります。

既にハリヤナ州カルコダで新工場の建設に着手しておりますが、本年4月には更に追加で100万台規模の新工場を建設することを発表いたしました。加えて、販売網・サービス網の拡充、商品力の向上、業務のDX化等事業全体の急速な拡大と変化に対応してまいります。そのため事業を支える人材の確保と育成にもこれまで以上に積極的に取り組んで参ります。

2023年7月31日
スズキモーターグジャラート社のマルチスズキへの売却を発表

<スズキモーターグジャラート>

2014年3月：会社設立

2017年2月：第1工場SOP（生産能力25万台/年）

2019年1月：第2工場SOP（生産能力50万台/年）

2021年4月：第3工場SOP（生産能力75万台/年）



 **マルチスズキへの
生産機能の集約に
よる生産性向上**

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 18 / 37

そのための取組みの一環として、2023年7月31日に、現在スズキの100%資本の製造工場、スズキモーターグジャラート社のマルチスズキへの売却を発表しました。

スズキモーターグジャラート社、通称SMGは、2014年にグジャラート州のハンサンプルに会社設立し、2017年に当初は1つの工場、年間25万台の生産能力で生産開始しました。

その後、2019年に第2工場を、2021年に第3工場での生産を開始して、現在では年間75万台の生産能力を有しております。

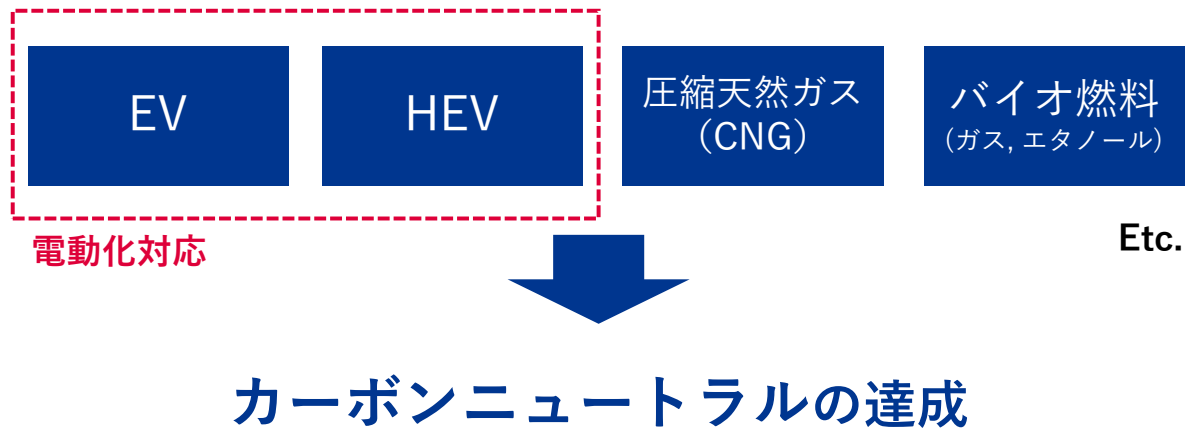
そんなグジャラート工場ですが、先ほどご説明した2030年までのインド国内の生産能力400万台を目指すにあたり、マルチスズキ経営陣との協議を重ねた結果、

生産の効率性を高めるためにも、生産拠点を集約すべきという結論にいたり、この度、マルチスズキの子会社とすることを発表させて頂き、現在進めております。

今後は生産能力増強はマルチスズキが、先行領域の技術開発はスズキが、といった様に役割分担を行い、協力していく予定です。

四輪事業：マルチパスウェイ

⇒ 地域・市場にあった適切な方法でカーボンニュートラルの達成を目指す



次に、カーボンニュートラルに向けた取組みです。
現在、インド市場は、日本を抜いて、中国、アメリカに次ぐ、世界で3番目の自動車市場まで拡大しており、今度も益々の成長が見込まれます。
そのような状況の中、走行時のCO2排出量がゼロであるEV車両は、カーボンニュートラルの達成に向けた一つの解決策であります。

しかし、カーボンニュートラルの達成には、走行時だけではない、総合的なCO2排出量の削減が求められます。
そのため、私たちはそれら車両の生産、電気などの燃料の精製の際に発生するCO2についても考える必要があります。
そうした考えの元、我々はCO2の総合的な削減には、EVに加えて、ハイブリッド車、CNG車、バイオ燃料車、さらには水素を使ったモビリティを、それぞれの地域・市場に合わせ組み合わせながら進めること、マルチパスな進め方が、重要と考えております。

次のページから、それぞれの具体的な取組みをご紹介します。

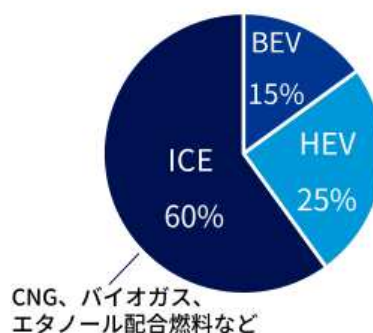
2030年度までの製品計画 (インド)

2024年度にバッテリーEV初投入

バッテリーEVラインナップ



パワートレイン比率



まずは、EV車両についてです。
2023年1月に発表しました2030年度に向けた成長戦略において、インドでは2024年度に、今回のジャパンモビリティショーで展示するeVXの量産車投入を皮切りに、2030年度までに計6モデルを展開予定であることを発表させて頂いております。

2022年3月、電気自動車(BEV)、及びBEV向け車載用電池の現地生産他の投資についてインド・グジャラート州と覚書を締結（約1,044億ルピー）

スズキはインドへの積極的な投資を継続し、インド政府が掲げる“自立したインド(Self-reliant India)”の実現に貢献します。



(写真：内閣広報室提供)

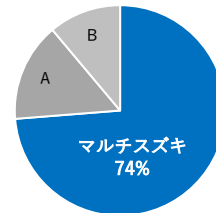
	会社	内容	投資額	稼働時期
1	スズキモーターグジャラート社	BEV生産のための生産能力増強	310億 ^{ルピー}	2025
2	スズキR&Dセンター社	BEV向け車載用電池工場の建設 (SMG隣接地)	730億 ^{ルピー}	2026
3	Maruti Suzuki Toyotsu India Private Limited	車体解体・リサイクル工場の建設	4.5億 ^{ルピー}	2025

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 21 / 37

また、電動化対応にむけ、2022年3月にインド・ニューデリーで開催された日印経済フォーラムの中で、電気自動車、BEVと BEV搭載用電池の現地生産に向け、インドのグジャラート州と覚書を締結しました。2026年までに総額1,044億ルピーの投資を実行する予定です。今後も、スズキはインドへの積極的な投資を継続し、インド政府が掲げる「自立したインド(Self-reliant India)」の実現に貢献します。

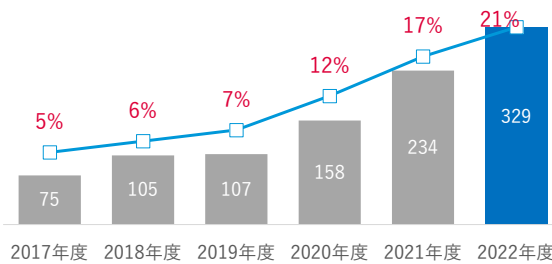
圧縮天然ガス（CNG）

- CNG車は、低価格で低CO2排出が特徴
- 乗用車14機種、商用車1機種にCNG仕様を設定
- CNG車のマルチスズキシェアは、74%（2022年度）
- インド政府もCN達成に向けて、CNG車活用を掲げる



CNG車シェア内訳(2022年度)

インドでのマルチスズキのCNG車の販売台数（千台）
マルチスズキ販売車両におけるCNG車の割合（%）



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 22 / 37

また、電動化だけではなく、CNG、圧縮天然ガスを利用した車の普及にも力を入れたいと考えております。

CNG車は、ガソリンよりも低価格で、CO2排出量もガソリンより、20%程度少ないことが特徴です。

マルチスズキでは、年々CNG車の販売台数を増やしており、2022年度は約33万台、販売車両におけるCNG車の比率は21%となり、インド全体のCNG車の販売シェアとしても74%を占めております。

カーボンニュートラルの達成に向けて、CNG車の活用を掲げるインド政府の戦略に即し、これからもマルチスズキはCNG車の普及促進にも取り組んでまいります。

牛糞由来バイオガス(CBG)

従来：大気中のCO₂ ⇨ 牧草（光合成）⇨ 牛の餌 ⇨ 糞尿 ⇨ メタンが大気中に放出

メタンは温室効果がCO₂の28倍も高い

牛糞(資源)を回収・バイオガス精製 ⇨ 自動車燃料に使用



アフリカをはじめとしたインド以外の新興国にも展開可能

バイオガスには“世界を変える”力がある



また、現在新たなビジネスとして取り組んでいるのが、インドの豊富な牛を活かしたバイオガスビジネスです。インドは牛が多く、牛の糞尿にはCO₂の28倍の温室効果を持つメタンが含まれ、大気中に放出されています。このメタンの大気放出を抑制し、牛の糞尿に含まれるメタンから、圧縮天然ガスを燃料とし、ガソリン車よりCO₂の排出量が少ないCNG車用燃料への精製を検討しております。

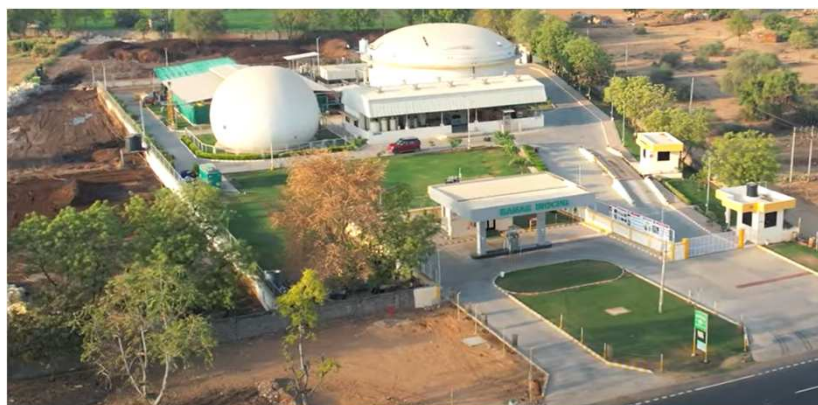
大気中のCO₂は光合成によって牧草に取り込まれ、牛の餌となります。牛から排泄される糞尿に含まれたメタンは大気放出されます。その糞尿を回収し、バイオガスを人為的に発生させて自動車用燃料を精製して利用することで、CO₂排出制限効果が生まれます。

従ってバイオガス燃料を用いた車からはCO₂が排出されますが、元々糞尿から発生するメタンをバイオガス燃料に精製したことでの、温室効果抑制分と差し引くことで、CO₂は抑制されたと言え、カーボンニュートラルとなります。

アメリカのカリフォルニア州の例をあげますと、自動車にバイオガス燃料を用いることで、1kmあたり748gのCO₂の排出削減効果があるというデータがございます。

加えてバイオガス発生後の残渣は有機肥料として利用でき、インド政府の有機肥料促進政策に貢献できます。

日本ではバイオガス燃料を主に発電として使用しています。しかしながら、インド、またはインドを皮切りとした世界中で、自動車に使用することで、自動車会社ならではの、メタンの大気放出抑制やカーボンニュートラル燃料の普及へ貢献することができます。それだけでなく、農村地域の活性化や新たな雇用の創出、廃棄物の資源化、エネルギー自給率の向上、循環型社会の形成などにも貢献できると考えています。



37

ここでご参考までに実際のバイオガス精製プラントの写真をご紹介します。
工場へ集められた牛糞は、この工場内でバイオガスへと精製し、隣接するCNG車用のガスステーションで自動車燃料として、又は、有機肥料として精製され、活用されます。

2023年9月

バイオガス生産プラントの設置について3者で合意

スズキ (SRDI)

アジア最大の乳業メーカー

Banas Dairy社



インド政府機関

全国酪農開発機構

2025年～

順次4つのバイオガス生産プラントを設置

- 予定投資額は合計23億ルピー（約40億円）
- 各プラントにはバイオガス充填スタンドを併設、CNG仕様車の燃料として販売



インド大使館で行われた契約締結式
(2023年9月6日)

そのようなバイオガス生産プラントの設立に向け、アジア最大の乳業メーカーであるBanas Dairy社、及びインド政府機関の全国酪農開発機構と、2022年12月に覚書を締結し、そして本年9月にプラントの設立に向けて3者で合意しました。

契約の調印式は、インド大使館で行われ、シビジョージ大使にもご臨席を賜りました。

今後、2025年以降に、順次4つのプラントをインドに設立予定です。

4. JAPAN MOBILITY SHOW 2023 出品概要

最後に、ジャパンモビリティショーに展示するスズキの出品についてご紹介いたします。

世界中に、 ワクワクの、 アンサーを。

メッセージ

将来のカーボンニュートラルにむけたスズキの多様な取り組みを、
スズキらしいモビリティやサービスでお客様にお届けする。

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 27 / 37

出展テーマは「世界中に、ワクワクの、アンサーを。」とし、
「将来のカーボンニュートラルにむけたスズキの多様な取り組みを、スズキらしいモビリティやサービスでお客様にお届けする」というメッセージとともに、楽しさ（ワクワク）を体感いただけるブース展示としています。

その中での出品車について簡単にご紹介させていただきます。

< 参考出品車 >

スズキのEV世界戦略車第一弾「eVX」

- 2023年1月にインドで開催された「Auto Expo 2023」で公開したエクステリアを進化させるとともに、インテリアを初めて公開
- 電子制御の四輪駆動技術をさらに進化させ、スズキのSUVに相応しい本格的な走行性能を実現するEVモデルとしてご提案



【主要諸元（参考値）】

- 全長4,300mm × 全幅1,800mm × 全高1,600mm
- 航続距離：500km

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 28 / 37

まず、スズキのEV世界戦略車第一弾となるこちらの「eVX」は、今年1月にインドで開催された「Auto Expo 2023」で公開したエクステリアを進化させるとともに、インテリアを初めて公開します。eVXは2025年から、欧州、インド、日本をはじめ世界で導入していきます。

<参考出品車>

毎日の生活に寄り添う軽ワゴンEV「eWX」

- スズキの軽自動車の特長である楽しく実用的な軽ワゴンと、EVらしい先進感をクロスオーバーさせたコンセプトモデル
- EVらしくすっきりとしたシンプルなボディ造形に、親しみやすいキャラクターを施したエクステリアと、軽やかで使いやすく居心地の良い室内空間で、毎日の生活を支える「相棒」のような存在を表現

【主要諸元（参考値）】

- 全長3,395mm×全幅1,475mm×全高1,620mm
- 航続距離：230km



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 29 / 37

次に、こちらはスズキ初の軽乗用EVコンセプトモデルである「eWX」です。EVならではの先進感と、スズキらしいカジュアルさ・親しみやすさを体現する、実用的で使えることを重視した軽ワゴンです。

<参考出品車>

毎日の“はたらく”に寄り添うBEV商用軽バン「e EVERY CONCEPT」

- スズキ、ダイハツ工業株式会社、トヨタ自動車株式会社の3社で共同開発してきた、BEVシステムを搭載した商用軽バンのEVモデル
- 軽バンの使い勝手の良さはそのままに、EVならではの静かで力強い走りを実現するだけでなく、非常時にはクルマの電気を外部に供給するなど、地域社会へ貢献できるモデルとしてご提案

【主要諸元（参考値）】

- 全長3,395mm×全幅1,475mm×全高1,890mm
- 航続距離：200km



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 30 / 37

ダイハツ、トヨタ、スズキの3社で共同開発してきた商用軽バンのEVモデルも参考出品いたします。

<参考出品車>

「スペースシア コンセプト」・「スペースシア カスタム コンセプト」

- 個性的なスタイルと広い室内空間を持つスペースシアに「日常をもっと楽しく便利に快適に！」の想いを詰め込んだコンセプトモデル
- 後席には、座面の前方に「マルチユースフラップ」をスズキとして初採用するなど、後席の快適性を向上
- 日常をユニークに彩る「心地よさ」と「ワクワク感」をデザインした「スペースシア コンセプト」と、「上質感」と「華やかさ」をデザインした「スペースシア カスタム コンセプト」を出品



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 31 / 37

また、コンセプトモデルの参考出品車として、スペースシアコンセプト、スペースシアカスタムコンセプトも出品いたします。

本モデルはユニークで頼りがいのある大容量なコンテナがモチーフとなっており、普段の生活の可能性を広げてくれる「コンテナハウス」をイメージしています。

<参考出品車>

「スイフト コンセプト」

- 「Drive&Feel」という言葉を大切に開発し続けてきた「スイフト」の新たな価値をご提案するコンセプトモデル
- 大切なのは、“モノ”ではなく“コト”。そう変化してきている世の中で、「スイフト コンセプト」は「デザイン」と「走り」だけではなく、「クルマと日常を愉しめる」という新しい価値を提供するモデルとしてご提案
- 衝突被害軽減ブレーキ「DSBSII」※1や「AHS」※2、「DMS」※3など数多くの先進安全技術を搭載
- 高効率エンジンの搭載などにより、走行性能と燃費性能の向上を両立



※1 デュアルセンサーブレーキサポートIIの略
※2 アダプティブハイビームシステムの略
※3 ドライバーモニタリングシステムの略

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 32 / 37

こちらのスイフトコンセプトも、「Drive&Feel」という言葉を大切に開発し続けてきたスイフトの新たな価値を提案するコンセプトモデルとして参考出品いたします。

<参考展示>

インドでのCBG※事業（ワゴンR CBG車の展示）

- スズキは、農村の活性化、持続可能な循環型社会の実現とモビリティの提供を組み合わせることにより、インドの発展に貢献できると考え、2022年よりCBG事業に取り組んできた
- ブース内では、5月に開催された「G7広島サミット（主要国首脳会議）」に合わせた展示イベントに出品したインド市場向けの「ワゴンR CBG車」の展示や、パネル・映像などでインドでのCBG事業の取り組みをご紹介します



※Compressed Biomethane Gas（圧縮バイオメタンガス）の略

© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved. 33 / 37

また、先ほどのスライドでもご説明させていただきました、インドのカーボンニュートラル実現に向けてスズキが取り組んでいるバイオガス事業についても「ワゴンR CBG車」の展示やパネル・映像などでご紹介いたします。

電動車いす
「スズキセニアカー」



電動小型モビリティ
次世代四脚モビリティ
「MOQBA (モクバ)」



電動パーソナル/マルチユースモビリティ
「SUZU-RIDE/SUZU-CARGO」



SUZU-RIDE



SUZU-CARGO



電動新モビリティ「SUZUKI GO!」



ラストマイル配送ロボット「LM-A」



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved.

他にも、電動車いすのセニアカーや、移動の障壁を解決できる、次世代四脚モビリティのモクバ、さらに新たなパーソナルモビリティとして電動小型モビリティや電動パーソナル/マルチユースモビリティなどをご提案します。

これらのモビリティによって、自分の意志で自由に移動する課題を解決し、安心安全に、気軽に、お出かけができる価値を提供します。

JMS 出品 | その他 参考出品車



折り畳み電動モペッド
「e-PO (イーポ)」



アシスト自転車の電動ユニットを使用した
近距離モビリティ「e-choinori (イーチョイノリ)」



電動スクーターの実証実験車
「e-BURGMAN (イーバークマン)」



<二輪技術展示車>
水素エンジンバークマン (試験車両)



電動船外機「Small e-outboard concept」



© Suzuki Motor Corporation, 2023. All rights reserved.

35 / 37

こちらは二輪や船外機のコンセプトモデル、参考出品車です。

<参考展示>

湖西工場での水素燃料電池荷役運搬車の実証 (パネル展示)



<参考展示>

軽トラ市を模した物販ブースと移動販売事業者向けサービス (アプリ)



<参考展示>

「空飛ぶクルマ」(株式会社SkyDriveとの協業)の展示

- ブース内では1/5サイズのスケールモデルを展示

参考展示として、湖西工場での水素実証事業についてのパネル展示や、移動販売事業に特化したアプリ、SkyDriveとの協業として空飛ぶクルマの5分の1サイズのスケールモデルなども展示いたします。

このようにスズキブースでは、四輪車、二輪車のコンセプトモデルをはじめ、次世代モビリティ、船外機など、総合モビリティメーカーとしての技術を結集し、人々の生活に寄り添う多彩なモビリティをご提案するほか、インドにおけるCBG事業など、マルチパスウェイでのカーボンニュートラルへの取り組みもご紹介いたしますので、スズキブースへご来場の際はぜひご覧ください。



将来予想に関する注意事項

- このプレゼンテーション資料に記載した将来予想は、現時点で入手可能な情報及び仮定に基づき当社が判断したもので、リスクや不確実性を含んでおり、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。
- 実際には、様々な要因の変化により大きく異なることがありえますことをご承知おき下さい。
- 実際の業績に影響を及ぼす可能性がある要因には、主要市場における経済情勢及び需要の動向、為替相場の変動（主に米ドル／円相場、ユーロ／円相場、インドルピー／円相場）などが含まれます。

ご清聴ありがとうございました。